

1. 緒言

生活志向の多様化，個人ベースの消費に移りつつある昨今，多品種少量生産型の笠間焼においても，高齢者や手の力の弱い方などに対応した注器製品等の対応はまだ未開発である。また，注ぎ口や取っ手・ハンドルの形状・角度などは，作り手のカンと経験で作られているため，標準化されていない。そこで注ぎ口や取っ手・ハンドルの形状・角度などの調査・検討を行い，使いやすさを追求した注器製品の開発を行う。笠間焼にとって新たな付加価値をみいだせるのではない。

2. 内容

当研究はデザイン調査・機能追求等の情報収集，試作およびモニターによる使い勝手の検討を行う。

また，モニターからのフィードバックから得た情報を活かしたデザイン・試作を行い，製品化への普及を図る。

第1報では情報収集で得られた注器についての概要の一部を報告する。

2.1 対流について

急須，ポット等の茶器は凡そ丸い形状をしている。この形だけは千数年の間、殆ど基本形は変わっていない。なぜなら沸騰したお湯を急須，またはポットに注ぐと中で対流が起こり，この対流により茶葉が上下し，成分が抽出されるのである。角張った茶器は対流が起こりにくくなる。

2.2 世界の注器

ヨーロッパ文化の影響により，殆どの国の注器は取っ手が後ろ手になっている。日本の急須のような横手タイプは中国・香港の一部，韓国でしかみられない。韓国の急須の取っ手は日本の約倍くらいの長さになっている。

2.3 急須について

日本の急須は中国から伝来された。中国では寺院などでからでも解るように「左右対称」を重んじる傾向があるため，バランスの良い左右対称のデザインの茶器が好まれている。日本に於いて，取っ手が横手になったのは，中国でお酒をカンするために使用された「きびしょ」と呼ばれた物を，煎茶用に転用したからだと言われている。煎茶で用いる壺形で，蓋・注ぎ口・取っ手のついた小さな器のこと。江戸時代から使用されはじめ，煎茶ではお湯を沸かすための道具であった。この「きびしょ」がなまって急須と呼ばれるようになったと言われている。

2.4 注ぎ口について

注ぎ口の角度によって，注いだ時に，中身の水分が後ろにまわってしまう「しり洩り」は同一形状のポットにおいては，注ぎ口の切り口の断面角度に影響される。断面が直角になるにつれ「しり洩り」は少なくなっていく。

2.5 筋力について

使用する人間のデータ，筋力については，3秒間程出力できるものとして測定した結果，20歳代を100とした相対的变化を示した。指でつまむ力は左右こみの値である。加齢による筋力の低下は筋によって異なるが，40歳代後半くらいから低下していくのがみられる。握力に関しては，若年のころは男女差がみられるものの，年代が増すにつれ，差がみられなくなっていく。また，指先でつまむ力は年代が増すにつれ，男女差がかなりでてくるのが解っている。

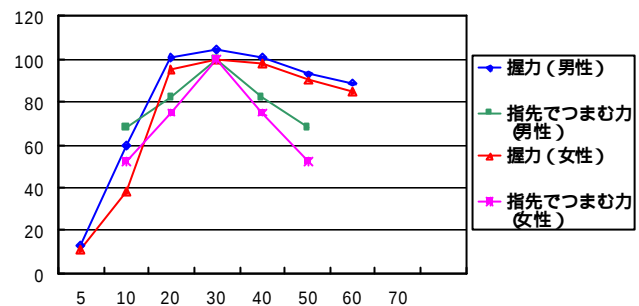


図1. 筋力について

* 縦軸：相対的筋力。横軸：年齢（歳）

参考文献：人間工学基準数値数式便覧

3. 結果

今年度収集した情報をもとに，高齢者や手の力の弱い人を考慮し，機能性と笠間焼らしい個性あふれるオリジナリティを重視した注器を開発していくと共に，笠間における注器製品の改善と産地技術のレベルアップを図っていく予定である。